

歴史を眼差す位置 ——「命どう宝」という言葉の発見——

屋嘉比 収

はじめに

一、 平和の礎でのクリントン演説

二、 「命どう宝」

結びにかえて

はじめに

二〇〇〇年七月二日から二三日まで、沖縄県名護市でサミット首脳会議が開催され、沖縄は世界のメディアから脚光を浴びた。沖縄が注目されたのは、サミット日本開催で、最初の地方都市での開催という事実によるだけではない。沖縄という地域に、日米安保条約の要である在日米軍基地が過度に集中しており、近年その基地の「整理・縮小」が日米両政府のあいだで重要な懸案事項になっているからである。一九九五年九月に沖縄本島北部で発生した在沖米海兵隊員三人による少女暴行事件を契機として、沖縄では復帰後最大規模の県民総決起大会が開催され、日米両政府に対して、在沖米軍基地の整理縮小や地位協定の見直しなどの諸課題がつよく提起された。それに対し日米両政府は、「沖縄における施設及び区域に関する特別行動委員会（SACO）」で合意した施設区域、とくに沖縄

本島中部の宜野湾市の市街地に隣接する普天間飛行場を本島北部の名護市東海岸にある辺野古沿岸へ移設する計画を発表し、その北部地域への巨額な経済振興策を提示しながら、沖縄県や名護市を抱き込んで、普天間基地の北部移設を推進している。

さらにその名護市東海岸への基地移設を推進する代償として、当時の小淵首相の政治的判断によって最大のカードとして提示されたのが、同じ名護市の西海岸で沖縄サミットの開催決定であった。沖縄県の事前の予想からしても、国内の他の候補地に比べて離島県である沖縄での開催は、警備の安全上の問題や他地域に比較して莫大なコストを要するなど、安全面や条件面において極めて困難な状況にあると報じられていたにもかかわらず、それが小淵元首相の政治的判断によって最終的に決定されたのである。政府から沖縄開催決定の通知がなされた時、沖縄県知事自身が最も驚いたと報じられたように、それは沖縄でもまったく予想外の展開であった。しかし、元首相が決断した背景には、普天間基地の名護市東海岸への移設問題が重要な意味をもっており、それと密接にリンクしていることは周知の事実であった。すなわち、サミットの

沖縄開催は、同じ名護市に移設計画のある普天間基地の問題と一対のものとして考えられ、決定されたことは明らかであった。それはまた沖縄サミットにおいて、日米政府の両首脳が日米安保条約のキー・ストーンである沖縄の地で直接に友好的パフォーマンスを演出することで、日米同盟をアピールするために絶好の政治的効果を果たすとの思惑もあったことは疑いない。沖縄でのサミット開催が、そのような背景や状況のもとで、本島北部名護市の西海岸で行なわれた事実がまず確認されなければならない。

一、平和の礎でのクリントン演説

一方、クリントン米国大統領は、その直前まで行われていたキャンプデービッドでの中東和平交渉が難航し、最後まで沖縄サミットへの出席が危惧されていた。だが、大統領の「平和の礎での演説」は、米国のアジア戦略のうえで欠かせない「日米安保と沖縄の重み」を考えると、沖縄開催に欠席することはできなかった。そのため大統領は、強行日程のなか東京経由の予定を変更しながらでも、沖縄へ直行せざるをえなかったのである。そして七月二日、クリントン大統領は大型の専用ヘリで、沖縄戦の犠牲者を祀った沖縄の聖地である、糸満市摩文仁の平和祈念公園内特設ヘリポートに降り立ったのである。それから、「平和の礎」でのクリントン大統領の演説にいたるまでのセレモニーは、米国側が主導権をにぎって用意周到に準備され

た内容で、細部まで計算され尽くした演出であった。そのような細部まで演出されたセレモニーにおいて、その演説の内容とともに、パフォーマンスが重要な意味をもっていることは指摘するまでもない。その最初の演出は、大統領が大型の専用ヘリで降り立った後から、「平和の礎」にいたるまでの道程を、沖縄県知事の案内と説明に耳を傾けて二人で会話を交わしながら歩いていくというものであった。また、その途中にある犠牲者の名前が刻まれた礎の銘板の前では、大統領が沖縄戦で肉親を失った遺族の説明に、しゃがみながら熱心に話を聞き入るという場面が演出された。それらは、沖縄の声にも耳を傾けている米国大統領の寛容と配慮を演出するようなパフォーマンスだったといえよう。その後、大統領は広場の中心部にある「平和の火」に向かい、県知事とともに黙祷を捧げて、沖縄戦の戦没者に哀悼の意を表した。その後に大統領は、沖縄の美しい自然景観を象徴する青空と青い海を背景に、まさしく「平和の礎」を舞台装置として最大限に利用して、演説に臨んだのである。その大統領の演説の前には、県知事のスピーチと女子高校生のメッセージが述べられ、女子高校生から大統領へ花束の贈呈があり、米国と沖縄との友好関係を象徴するような演出が行なわれた¹。

¹ その平和の礎でのクリントン演説に関連して、沖縄では新聞紙上で多く論じられた。それを列挙すると次のようになる。高良倉吉「識者評論・クリントン大統領演説」(『沖縄タイムス』二〇〇〇年七月二日)。我部政明「識者評論・クリントン大統領演説」(同上)。石原昌家「米国大統領の演説を聞いて」(『琉球新報』二〇〇〇年七月二日)。宮里政玄「米国大統領の演説を聞いて」

その大統領の演説にいたるわずか十分たらずの「平和の礎」でのセレモニーにおいて、注目される点が少なくとも三点は指摘できよう。その一つは、このセレモニーでは、日本国政府の代表が不在であったという点である。米国大統領を案内して説明したのは、日本国政府を代表するものではなく、沖縄県知事や沖縄戦の遺族会の代表であった。それはサミット主催国のため主として日程的な都合によるものであろうが、米国大統領の演説が注目され世界中に報道されることを勘案すると、対外的に日本国家を代表する立場にない沖縄県知事が、このセレモニーのホストの位置を占めていた事実はあらためて注目されてよい。むしろそれは、日米両国家の関係において、すなわち日米安保条約に占める沖縄の位置の重要性に因るものであるが、本来、二国間の安全保障という政府レベルで優先されるべき領域においても、日本国内の一地域にすぎない沖縄の意思が無視できない点を、それは暗に示している。残念ながら、沖縄県がその位置を有効的に活用しているとはいえないが、逆

に言うとお沖縄は日米両政府間の交渉の間隙において、沖縄という地域から問題を提起することが可能な、両義的な位置を占めていることを表している。したがって、米国大統領も米国の東アジア戦略のうえで日米安保の要である沖縄を重要視せざるをえず、沖縄県民へ配慮する姿勢やパフォーマンスを演出せざるをえなかったというわけである。二つめは、それに関連して、米国大統領が県知事と二人で歩きながら会話をするというパフォーマンスや、犠牲者の名前が刻まれた礎の銘板の前で沖縄戦の遺族代表と対話した点に見られるように、大統領が沖縄の人々の話を聞いて配慮するという姿勢がことさら重視された点である。そして、「平和の礎」という沖縄を象徴する場で、大統領は寛容さをもって沖縄の人々の話に聞き入った後に、それに自らの演説によって返答するという仕掛けが演出されたのである。その意味で、その仕掛けにみられる米国と沖縄との関係は、いまだ米軍統治下におけるパターナリズムの手法の延長線上にあると指摘することもできよう²。三つめは、このセレモニーで米国と沖縄との関係を寓意する独自の役割として位置付けられたのが、クリントン大統領の演説の前にメッセージを読んだ

（同上）。宮城康博「『平和の礎』での大統領演説」（『沖縄タイムス』二〇〇〇年七月二七日）。高良倉吉「クリントン大統領演説」（『同』七月三十一日）。ダグラス・ラミス「クリントン演説」（『同』八月一日）。安里進「クリントン演説の『命どう宝』」（『同』八月十一日）。花城豊「論壇・歴史的根拠と現実」（『同』八月十一日）。鄭杜鎮「沖縄と韓国の連帯のために―米大統領の『命どう宝』上・下」（『同』八月一四日、一五日）。大城立裕「『命どう宝』異聞―クリントン演説を機に」（『琉球新報』二〇〇〇年七月二五日）。目取真俊「まやかしのクリントン演説」上・下（『同』七月二九日、三十一日）。上里和美「サミット―沖縄の心は？」（『同』八月四日）。新城栄徳「命どう宝！山里永吉の芝居の世界」（『同』八月三〇日）。田里修「沖縄研究概観二〇〇〇・サミットをめぐる問題」（『沖縄文芸年鑑二〇〇〇年版』沖縄タイムス社、二〇〇〇年十二月三〇日）。屋嘉比収「歴史への眼差し」（『ナール風』二八号、二〇〇〇年九月号）。屋嘉比収「歴史を眼差す位置」（『沖縄タイムス』二〇〇一年十月三十一日）。

²米国の沖縄統治における「パターナリズム」については、宮里政玄『アメリカの沖縄統治』（岩波書店、一九六六年）を参照。なお、ダグラス・ラミス氏はクリントン演説の中の一文「知事、私はあなたの（略）当地でのリーダーシップに感謝する」について次のように指摘している。「クリントンのこの感謝状は、米国大統領が、沖縄県知事は『米合衆国のために』に沖縄を統治しているものとみなしていることを意味する。それは宗主国が植民地の統治者に向かって言う言い方である」（『沖縄タイムス』二〇〇〇年八月一日）。そのクリントン演説の中に、米軍占領下の沖縄統治から今でも続いている「パターナリズム」がみられる。

女子高校生の存在だった。女子高校生はスピーチで、クリントン大統領の訪沖への歓迎の言葉を述べた後で、沖縄から発進される平和のメッセージが全世界の人々の心に届くことを願って、大統領のメッセージをお願いしたいと言葉を続けた。その際、クリントン大統領にストレリチアという花束を贈呈し、その花言葉が「輝かしい未来」であることを付け加えた。その「輝かしい未来」という花言葉は、後で言及するクリントン大統領の演説内容の要点の一つである「未来志向」という基調と見事に符合するものであった。むろん、大統領演説と県知事や女子高校生のスピーチとの内容は、外交ルートを通じて一定の連絡・調整がはかられていると考えるのが当然であろう。だが重要なことは、沖縄の女子高校生の願う「輝かしい未来」を、米国大統領が寛容に受けとめて、それに「未来志向」を基調とした演説を行なう演出がなされた点である。それは、事前に外交ルートを通じて連絡や調整がなされていることをほとんど知るよしもない一般県民にとって、その場面をとらえて、大統領は沖縄を配慮した演説を行って良かったと評価する声へとつながっている。事実、大統領の演説の中で、県民感情を配慮しつつ、その女子高校生の願う「輝かしい未来」を受けとめ「未来志向」を基調とした内容に対して、県民の中から感激したと評価する声が多く聞かれた。その符合については、県知事のスピーチと大統領演説のあいだで指摘されている「基地の整理・縮小」についても言えようが（しかし、大

統領は演説の中で「基地の整理・縮小」ではなく、「米軍の足跡を減らす」という曖昧な表現を使って述べている）、その「未来志向」の基調にくらべると、頻繁に発生した米軍人・軍属の事件・事故や普天間基地の移設問題について具体的な言及がなかった点で、県民から多くの不満の声が発せられた³。

そして、そのセレモニーにおける女子高校生の役割に対して、多くの県民が複雑な思いをもって重ねながら見ていたのは、九五年九月に起こった米軍人による少女暴行事件の記憶であった。作家の目取真俊氏は、このセレモニーの演出と少女暴行事件の記憶との関係について次のように批判的に指摘している。「…演出効果も計算され尽くしていた。特に、少女へのわいせつ事件が米軍への反発を呼び起こしているなか、女子高校生を参加させたことは、反発のイメージをやわらげるものとして、アメリカ国内向けの映像に十分な効果があっただろう。平和を願い、大統領に花を託す高校生の気持ちは純粋でも、それがテレビの映像として世界に発信されるとき、メディアの政治力学によっていくらかでも意味は変容していくのである」⁴。そこで明快に指摘されているのは、メディアの政治力学とともに、アメリカや世界向けの映像のために演出されたパフォーマンスと沖縄における少女暴行事件の記憶に根ざした視線とのズレである。

³ 「基地問題に不満」「未来志向に感激」（『沖縄タイムス』夕刊、二〇〇〇年七月二一日）。

⁴ 目取真俊「まやかしのクリントン演説」上・下（『琉球新報』二〇〇〇年七月二九日、三一日）。

また、ヘリ基地反対協議会の宮城康博氏は、その女子高校生の姿に米海兵隊員に凌辱された少女のイメージを重ねて、自らの心情を次のように率直に吐露している。「沖縄の少女から求められて『輝かしい未来へ向けてのメッセージ』を行う米大統領という演出かもしれないが、演説を聞きながら米海兵隊員の凌辱の標的にされる沖縄の少女というイメージが脳裏に浮かび、大統領の手にする花を奪い返したい衝動に私はかまれた」⁵と。そのセレモニーをみる視線において、少女暴行事件の記憶の想起は、目取真氏や宮城氏だけでなく、県民の中で少なからず重なりあっていたといえよう。そのセレモニーで女子高校生は、自らの役割を明朗闊達に成し遂げますがすがいい印象を与えたにもかかわらず、県民の中では、米軍と沖縄との関係において決して看過できない、九五年の少女暴行事件の記憶が鮮明に想起されたのである。そのセレモニーで演出された友好関係の背後に、沖縄の中に歴然とある構造的暴力としての米軍基地の存在が、その記憶を絶えず想起させるのである。

ところで、目取真氏が指摘するように、米国側は、そのような演出効果を十分に計算尽くした上での、このセレモニーの演出だったことは疑いない。例えば沖縄の一部で在沖米軍基地の存在意義をアピールしたクリントン大統領の演説内容は、各国のメディアによって世界へ発進され、それに伴い沖縄の平和のメッセージも世

界に発進されたのだからサミットは成功だったという論調がある。それに対して、ダグラス・ラミス氏は、在沖米軍基地の存在意義をアピールしたクリントン大統領の「ゆがんだ平和のメッセージ」の方が比較にならないほどメディアによって発進された点を指摘している⁶。確かにメディアによって、クリントン演説やその前日に行なわれた嘉手納基地を人間の鎖で包囲した基地撤去の運動の方が世界に発進されたことは間違いなからう。しかし、ここで注目したいのは、それに関連する報道としてほとんど取り上げられることはなかったが、その女子高校生が、セレモニーでの自らに割り振られた役割を無難にこなしながら、次のような発言も同時に行っている点である。彼女は、大統領に会えたことを夢のようだと喜びつつも、「せっかく来てくれたのだから、ついでに基地も一緒に持って帰ってほしい」と地元紙の取材に対して述べているのだ⁷。その女子高校生の発言は、クリントン演説に対する沖縄の反応として、もっと注目されてもよいように思う。なぜなら、その女子高校生の発言は、日米両国に対する沖縄に割り振られた役割を演じながらも、それからはみ出して相対化する主張も含意しており、現在の沖縄における面従腹背の「二重の声」を率直に表しているといえるからである。

さて、「平和の礎」でのクリントン大統領の演

⁵宮城康博「『平和の礎』での大統領演説」(『沖縄タイムス』二〇〇〇年七月二七日)。

⁶ダグラス・ラミス「クリントン演説」(『沖縄タイムス』二〇〇〇年八月一日)。

⁷『沖縄タイムス』夕刊、二〇〇〇年七月二日。

説は八分弱のスピーチだったが、沖縄県民への配慮を示した表現が使用されるなど、セレモニーでのパフォーマンスと同様に、細部まで計算され尽くした完成度の高い演説だったと評価されている。その演説内容の基調については、少なくとも次の二つの論点が指摘されよう⁹。第一点は、「日米同盟の重要性」と「沖縄の死活的役割」の再認識である。大統領は演説の中で、沖縄は日米同盟関係の維持のため「不可欠な役割を担ってきた」が、沖縄の人々は米軍基地を自ら進んで受け入れているのではないこと、そして米国は「沖縄における私たちの足跡を減らすために、引き続きできるだけ努力」をすると言及して沖縄への配慮を示した。しかし、「日米同盟の重要性」を強調するだけで、大統領の演説からは基地問題について具体的な提言が示されることはなかった。その大統領演説の問題点について、国際政治学者の宮里政玄氏は次のように明快に指摘している。この大統領演説のようによく練られた演説では、その実際の発言内容だけでなく、言及されなかった言葉も重要な意味をもっている。演説では、米軍基地への「感謝の言葉」や米兵のわいせつ事件に対する「釈明の言葉」、さらに沖縄基地保有に関する「期限の言葉」も欠落している。確かに、巧妙に「平和の礎」を利用して過去の戦争を忘れ「未来志向」をうたった巧みな演説であり、さらに沖縄の基地の縮小にも言及してはいたが、むしろ「実

質的に沖縄基地の無期限保有の必要性を説く演説」だったと指摘している⁹。また、この演説を含めて大統領の沖縄での発言をあらためて検討すると、大統領演説は米国の東アジア戦略に基づいて、沖縄の「基地は減らせない」との冷徹なメッセージの通告だったとの論評がなされている¹⁰。

第二点は、演説に通底する「未来志向」の基調である。この論点は、前述したように女子高校生のスピーチと呼応したことにより、県民の評価が高かった部分である。その「未来志向」の基調は、演説の中で一点めの基地問題をおおひ隠して、それを弥縫するかのような役割を果たしている。そしてそれは、前述のセレモニーでの大統領のパフォーマンスと同様に、沖縄の声を大統領が聴いて受けとめ、それに応えるという形で演出されている。とくに大統領演説における「未来志向」の部分では、琉球大学の高良倉吉氏が主張している「沖縄イニシアティブ」の論調と響き合っている点が指摘されている¹¹。「沖縄イニシアティブ」とは、高良氏、大城常夫氏、真栄城守定氏の琉大三教授により、サミット開催前の三月末に那覇市で開催された「アジア太平洋アジェンダ会議（APAP）沖縄フォーラム」において「アジアにおける沖縄の位置と役割」として発表された提言である。

⁹朝日新聞社編『沖縄報告―サミット前後』朝日文庫、二〇〇〇年十月一日、三三七～三四四頁。

⁹宮里政玄「米大統領の演説を聞いて」（『琉球新報』二〇〇〇年七月二二日）。

¹⁰「米大統領『基地は減らせない』（『琉球新報』二〇〇〇年七月二四日）。

¹¹目取真前掲論文（上）。朝日新聞前掲書、三四一頁。

この会議は、来県中だった小淵元首相や中国、韓国、タイなどのアジア主要国、米国、カナダ、日本の国際関係や安全保障、経済開発の研究者やジャーナリストが出席して、「非公開の会議」（『琉球新報』二〇〇〇年五月七日）として行われた。会議を主催したのは、財団法人・日本国際文化センターで、主催者側は同会議を「七月の主要国首脳会議（九州・沖縄サミット）開催の意義についての知的貢献が期待される」と意味付けしている。高良氏は、その提言について、沖縄では「もっと自由にさまざまな意見が提示されるべき」であり、それは「私たちなりの一つの展望を自由に提示したままである」と述べている¹²。高良氏のその指摘は当然のことであり、私自身もその部分については異論はない。しかし、問題はそのような位相にあるのではない。その「沖縄イニシアティブ」の提言が、どのような文脈で、だれに向かってどう語られたのか、が徹しく問われているのだ。三教授の提言は、小淵元首相が出席した非公開の会議の中で、沖縄サミット開催への「知的貢献」として、日本政府における沖縄の基地政策を沖縄側から補

完する提言として行われた。この沖縄側からの提言は、具体的にはサミット後に名護市辺野古沿岸域への普天間基地移設が推進される状況下で、日米同盟が果たす安全保障上の役割を評価する立場から、沖縄の米軍基地の存在意義を認める見解として提起されたのである。その経緯が示すように、この提言は沖縄住民に対して行われたのではなく、日本政府の政策に寄与するために提起されたものである。すなわち、サミット前のその会議において、政府の沖縄の基地政策に対して沖縄側から積極的な支持を与えるという、きわめて意図的な「政治的文脈」によって行われたのだ。確認するために繰り返して述べるが、「沖縄イニシアティブ」問題は、自分の考える意見を自由に述べただけだという一般論のレベルではなく、その提言がだれに向かって何をどのように語ったのかという、その提言の「政治的文脈」が問われていることを重ねて指摘しておきたい。

そして、その「沖縄イニシアティブ」を中心にまとめた高良氏は、さらに平和の礎でのクリントン大統領の演説に関して事前に、「沖縄をめぐる歴史や文化の問題、基地問題の論点などについて」「二度、東京の米国大使館のスタッフから意見を求められ」、「助言」を行った事実を、自ら述べている¹³。高良氏が、米国大使館のスタッフから大統領演説に関して意見を求められたのは、沖縄の歴史文化について氏が精通して

¹²高良倉吉「『沖縄イニシアティブ』の考え方」（『沖縄タイムス』二〇〇〇年五月二三～二四日）。なお、その提言を行った三氏は、そのイニシアティブの本文や三氏の関連の文章に新たに三氏による鼎談を加えて、共著『沖縄イニシアティブ』（ひるぎ社、二〇〇〇年九月）を発売している。その中で、前述の会議が「非公開」で小淵元首相が出席した点について、事実関係が正確ではないと指摘している。本文でも言及したように重要な論点は、同提言がどのような政治的文脈で、だれに対して何をどう語ったのかが問われているのである。なお、その「沖縄イニシアティブ」の論争を「グローバル化の中における沖縄の記憶とアイデンティティをめぐる闘い」として論じた見事な論考に、井上雅道「グローバル化のなかの『沖縄イニシアティブ』論争」（『思想』二〇〇二年一月号）がある。

¹³高良倉吉「クリントン大統領演説」（『沖縄タイムス』二〇〇〇年七月三一日）。

いるとの点もあろう。だがしかし、その大きな要因は、高良氏が「沖縄イニシアティブ」で地元沖縄から米軍基地の存在意義を認める提言をした点が重要な意味をもっていたことは想像に難くない。米国側にとって、日米同盟の安全保障上の役割を評価して沖縄の米軍基地の存在を評価する高良氏の主張は、在沖米軍基地の存在意義をアピールしたい今回の大統領演説にとって、沖縄側からのもっとも良き理解者による論調であったといえよう。高良氏は、沖縄サミット開催の前に「沖縄イニシアティブ」を提唱し、また平和の礎での大統領演説に助言をして関わっているように、きわめて政治的な役割を担い、それを果たすような言動を行っている。しかし、ここで問題にしたいのは、高良氏のそのような直接的な政治的役割に関してではない。琉球史研究という学問的意匠による非政治的立場を装いながら、きわめて政治的な役割を果たしている、その〈政治性〉の問題についてである。それは、党派的な主義主張やイデオロギーなどの「政治性」とは位相を異にした、関係における認識や解釈などの〈政治性〉の問題である¹⁴。その点で、クリントン大統領が演説の最後の部分で言及した「命どう宝」という語句の解釈や認識の問題は、沖縄研究における歴史的眼差しのもつ〈政治性〉について具体的に問いかけるものであった。

二、「命どう宝」

高良氏は、クリントン大統領の演説の件で、アメリカ側のスタッフから、尚泰王が詠んだと言われている「命どう宝」の琉歌についての質問を受けて、次のような助言を行ったと述べている。専門家の意見を参考にして、その琉歌は尚泰王本人が詠んだ証拠は何もなく、むしろ昭和戦前期に劇作家の山里永吉氏が書いた脚本『首里城明け渡し』の沖縄芝居で上演され、普及したいわばフィクションであり、それを承知のうえで自由に判断してくださいと答えた。だが、大統領演説では、むすびの部分においてその琉歌に込められた精神や希望を、普遍的なものとして解釈して使用されたという。そして高良氏は、そのように言及した後に「沖縄においては、多くのフィクションが罷り通っており、『反戦平和を希求する精神、すなわち『命どう宝』』は「そのようなキャッチフレーズの一つ」¹⁵だと指摘して次のように続けてのべている。「『命どう宝』はいつ、どのような背景を帯びて歴史に登場したのか、その具体的な事情をこの私に説明してもらいたい。『昔から沖縄の人々は…』と言う時、その昔はいつのことなのか、どのような『沖縄の人々』がいかなる文脈でこうしたメッセージを唱えたのか、そのことを教えて欲しい。沖縄の歴史を生きた先人たちが、どのような現実の中でこれらの言葉を発し、それがどう受け継がれてきたのか、歴史のリアリテ

¹⁴ ミシェル・フーコー／渡辺守章訳『性の歴史Ⅰ 知への意志』新潮社。見田宗介『現代日本の感覚と思想』講談社学術文庫、一九九五年四月、一九三～一九八頁。

¹⁵ 高良前掲論文。

イーを説明して欲しい。残念ながら、『沖繩のころ』を表示すると力説されるこれらの言語群は、その出所・経歴がまことに曖昧である。根拠不明な言葉を、あたかも不動の価値や前提であるかのごとく主張する安易さ、また、そのような事態のままでしかないことに対する緊張感の薄さは、たちまち『外部』の第三者の『侵入』を容易にする」と。そして、高良氏は、大統領演説の中で「命どう宝」という語句が使用されたのは、その「出所・経歴が曖昧で根拠不明な言葉をあたかも不動の価値や前提であるかのごとく主張している」沖繩側にも問題があると指摘し、大統領演説を批判する論者に対して「問われるべきなのは大統領演説のほうなのか、それとも私たちなのか」と逆に問い掛けたのである。

私は、その高良氏の文章を読んで、強い違和感をおぼえた。たしかに、その「命どう宝」という語句は、史実性の観点からして曖昧で根拠不明な点もあり、その出所経歴を史的に明確に説明する必要があるといえよう。その点については、高良氏の指摘に異論はない。だがしかし、その高良氏の指摘は、この「命どう宝」という語句が内包する問題の半分を指摘しているにしかすぎない。むしろ重要なのは、次の点ではなかろうか。その「命どう宝」という語句が、史実性において曖昧で根拠不明であっても、それが沖繩で広く流布し、しかもその語句に沖繩の人々が反戦平和の願いとイメージを託している事実こそが重要だという点である。歴史研

究において、事実性や実証性の解明が重要な意義をもっていることはあらためて指摘するまでもない。ただ思想史研究では以前から、ファクト（事実）とは別に、そのイメージも独立に扱われ、イメージのもつリアリティーも同じように重要な分析の対象となっている。そのイメージがなぜ形成されたのか、その背景にある時代や社会の価値体系や思想状況の分析も、同じく重要な課題として論じられている¹⁶。また、出来事に対する事実性の探究という位相だけでなく、その語句に込められたイメージや言説がなぜ形成され編成されているかは、最近の歴史研究の動向でも重要なテーマの一つとして論究されていることは周知のとおりである。その意味において、いま、沖繩の歴史研究に問われているのは、その「命どう宝」という語句を、実証性の観点から批判的に論究して裁断することではない。むしろ、そのような史實的に曖昧で根拠不明といえる語句が、なぜ戦後沖繩で形成され反戦平和のイメージを体現する語句として流布しているのかを考察することも、同じく重要な課題だといえる¹⁷。以下、その「命どう宝」という語句を、その歴史的起源を考察して史実

¹⁶丸山真男「思想史の考え方について」（『思想史 歴史科学大系 第20巻』校倉書房、一九八三年十月、一九八頁）。

¹⁷神話を、事実性や実証性の観点からだけでなく、なぜその神話が形成されたかを考察することの重要性をいち早く指摘した論考に、岡本恵徳「曾野綾子『ある神話の背景』をめぐって」（『沖繩タイムス』一九七三年六月八日～十日）がある。岡本氏はそこで、沖繩県渡嘉敷島の「集団自決」を扱った曾野綾子『ある神話の背景』（文芸春秋社、一九七三年）がやはり問題点を、先の論点から鋭く論じている。最近、それと同様な指摘を上野千鶴子氏が行っている（上野千鶴子・川村湊・成田龍一鼎談「戦争はどのように語られてきたか」『小説 トリッパー』朝日新聞社、一九九八年、一八頁）。

的に明らかにするあり方ではなく¹⁸、それをあ
る時代状況や社会の価値観を背景に編成再編さ
れた言説としてとらえて、その分析を試みるこ
とにしたいと思う。

さて、その「命どう宝」という語句は、庶民
の生活の中で息づきながら個々の場面で使用さ
れていた事例もあろうが、戦中から戦後初期に
書かれた文章ではほとんど確認することはでき
ない。その語句の一部である「命」という言葉
が、沖縄社会の中である時代の状況や価値観を
体現して使用されるようになるのは、一九六〇
年代後半においてである。一九六八年九月に米
軍の原子力潜水艦が那覇港に入港して事故を起
こし、放射能汚染でコバルト 60 が検出され、ま
た同年十一月には嘉手納基地内でB52 が墜落
して大爆発する事故があった。しかも、その墜
落爆発した現場からわずか約百五十メートル離
れた地点には常時厳重警戒が行われていた知花
弾薬集積所があり、翌日になって新聞でその地
下室に核兵器貯蔵庫が存在することが基地関係
者の談話として報じられたため、より緊迫した
状況をむかえ、多くの県民に強い危機感が生じ
広範な抗議運動が展開された¹⁹。そしてその墜

落事故をきっかけに、県内百余の団体が参加し
て「いのちを守る県民共闘会議（B52 撤去・原
潜寄港阻止県民共闘会議）」が結成され、四万人
余を集める県民大会が開催された。そのような
緊迫した状況下に同会議の声明文の中で発せら
れた、県民の「命を守るのを何よりも優先」²⁰す
るという表現に象徴されるように、その「命」
という言葉がこの時期の沖縄社会の中で、ある
切実さをもって語られるようになったのである
²¹。しかし、その時には「命」という言葉に新
たな照明が当てられたが、まだ「命どう宝」と
いう語句は登場していない。その語句が語られ
て使用されるようになるのは、むしろ復帰後で
あり、沖縄戦から三十三回忌を終えた後の一九
七九年前後のことである。

その語句が概念化された形で文章の中で確認
できるようになるのは、管見の限りでは、一九
七〇年代前半の『沖縄県史』（一九七一年、一九

然の認識になっているといえる。」（『琉球新報』一九六八年十一
月二一日）

²⁰ その表現は、十二月七日の「いのちを守る県民共闘会議」の
結成大会で語られたものだが、その時期の多くの県民の気持ちを
表しているものといえよう。例えば、ある高校生は「いのちこそ
すべてに優先」という文章で、米軍大佐のB52 墜落は交通事故
のようなもので基地がないと沖縄住民の生活が困るだろうとい
う発言や、主席公選で応援にきた自民党の石原慎太郎の沖縄は米
国支配で経済発展を遂げたという発言に対して、「沖縄の経済は
基地に依存しているかもしれないが、それは生命の次の問題では
ないか。一体生命なくして何が存在するのだ」と批判している
（「高校生は訴える」『高教組情報』第16号、一九六九年一
月二〇日）。

²¹ 当時の関係者によると、その「いのちを守る県民共闘会議」と
いう名称は「大変ショッキングな名称」で、当時の状況を「これ
程、言い得て妙なる表現は他にない」と指摘され、とくに本土側
にとつて、とうとう沖縄は『生命』という言葉を使うまでにき
たかという思いが込められていたと述べられている。嘉手納で開催さ
れた同会議主催の「B52 撤去要求県民大会」では、漁民やマチ
ヤ小（小売店）のおばさん達も含めて雨の中を四万人が参加した
（沖縄県祖国復帰闘争史編纂委員会編『沖縄県祖国復帰闘争史
資料編』一九八二年五月、一三二四～一三六頁）。

¹⁸ ミシェル・フーコー／伊藤晃訳「ニ―チェ、系譜学、歴史」（『ミ
シェル・フーコー思考集成Ⅳ』筑摩書房、一九九九年十一月、十
一～三八頁）。

¹⁹ 同日の『琉球新報』の、「B52 の駐留と核の脅威」という見出
しの「社説」で次のように記述されている。「…仮に、こんどの
B52 爆発事故が推察されている核貯蔵庫に影響して誘爆でもし
ていようものなら、沖縄全島が吹っとなだであろうことを思うと、
りつ然とする。…核装備できるB52 が駐留している現実から推
論して、核装備できるB52 があれば、核貯蔵庫があるのは、別
に不思議ではない。美里村の知花弾薬集積所の地下室に、核兵器
が貯蔵されているという推論も、未確認情報とはいえ確率は高い
であろう。以上の立場から沖縄における核の秘蔵は、ほとんど公

七四年)や『那覇市史』(一九七四年)の沖縄戦体験記の聞き取り調査を通じて、沖縄戦研究者の大城将保氏が書いた論考「戦争体験は継承しうるか」が初出である。大城氏が聞き取り調査を行なった両体験記録は、行政機関が住民の沖縄戦体験の証言を採録し文章化した、いわば沖縄戦を住民の視点から系統的に掘り起こした最初の記録集²²といえるものである。この時期は、全国的にも戦争体験記の掘り起こし運動が広がっており、県史や那覇市史の発刊はそれと連動するものといえようが、その後の沖縄戦記録集の編集方法と視点において一つの画期を成し、大きな影響を与えている²³。その沖縄戦の聞き取り調査を基盤にして大城氏は、先の論考の中で次のように論じている。これまでの沖縄戦に関する戦史や記録は、軍隊本位の作戦中心の記述が主流で、沖縄戦の犠牲を「殉国美談」の物語として描く傾向が強く、一般住民の被災の実相が欠落し軽視されがちであった。また実証的な調査が乏しいため、経験主義的な記述が多く総体的な把握が弱かったが、ここ数年、客観的な視点で沖縄戦の実相が記録され、戦場の暗部にも照明が当てられて記録全体の裾野が広がり、戦史資料の集積や多様なアプローチがなされるようになった。さらに、沖縄戦における軍民関係を解明するためには、軍隊の価値基準と隔たりのある沖縄の防衛隊の実態を正確に把握

しなければならず、その沖縄の防衛隊員にみられる行動様式の特徴として、軍隊の「玉砕の思想」とは異なった、「瓦全の思想」としての「命どう宝」の考えがあると指摘できる²⁴。後に大城氏自身が、その「命どう宝」という言葉について、「もともとは七十年代以降さかんになった戦争体験の掘り起こし運動の中から用いられるようになった俚語であった」²⁵と述べている。このように、この時期にはまだ、主として沖縄戦の聞き取り調査を行なっていた研究者を中心に使用されており、他の文章では確認できない。例えば、七九年の慰霊の日には、県原水協主催による「原水爆禁止、基地撤去、6・23 沖縄大会」が摩文仁ヶ丘で開催され、同時に「語ていいじゃなびらな戦世の沖縄(語ってみましょうよ戦世の沖縄)」という平和集会が一千二百人の人々を集めて行なわれている。その平和集会は、約五十人の沖縄戦の語りべが、テント六十余に分かれて、各二十人ちかい参加者に沖縄戦の悲惨な体験を語り継ぐ催しとして行われ、地元紙でも「新生面開く反戦運動」と報じられて高い評価を得た集会であった。その集会の声明文「沖縄アピール」の中で、「私たち一人ひとりが、黙して語らぬ死者のため息と怒りを共有して、『戦争』を語り受け継ぐ“平和の語部”になること」が高らかと述べられている。しかし、その声明文や関連記事の中にも、「命どう宝」という語句

²²沖縄タイムス社編『鉄の暴風 沖縄戦記』一九五〇年八月。

²³吉浜忍「沖縄戦後史にみる沖縄戦関係刊行物の傾向」(史料編集室編『史料編集室紀要』二五号、沖縄県教育委員会、二〇〇〇年三月、五八～五九頁)。

²⁴大城将保「戦争体験は継承しうるか—靖国思想から瓦全思想へ—」(『新沖縄文学』四三号、一九七九年十一月)。

²⁵大城将保「『沖縄戦』の現在」(『青い海』一四二号、一九八五年六月号)。

はまだ見られない。また八〇年の慰霊の日は、戦後三十五年の節目の年にあたったが、政府の中で有事立法の動きがあり、県内二七団体により「6・23 平和をつくる共同行動委員会」が結成され、それに反対する「共同行動声明」が発表された。だが、その声明文においても「命どう宝」という語句は使用されていない。さらに八一年の慰霊の日には、非核三原則に矛盾する米核積載艦の日本への核兵器持ち込み疑惑が明らかになったこともあり、それに対して地元二紙が共同で沖縄の声として「平和と非核を求めるアピール」を発表している。しかし、その声明文や関連記事にも「命どう宝」という語句は確認することができない。また八二年六月には、ニューヨークで第二回国連軍縮特別総会が開催され、沖縄からも十七団体二七人が参加して全世界に「ノーモア・オキナワ」をつよく訴えている。そして県内でもそれに呼応して平和連絡会議が結成され、六月を「沖縄・反核平和の月」と設定し、反核平和共同宣言をアピールして沖縄でも平和運動が興隆している。しかし、その宣言文でも「沖縄の心」という言葉は確認できるものの「命どう宝」という語句はまだ見あたらない。

そのような状況が大きく展開したのは、一九八二年六月に文部省の教科書検定において、高校教科書から沖縄戦での日本軍による「住民虐殺」の記述が全面削除された事実が、地元紙で

報じられてからであった²⁶。地元紙は、その問題が沖縄戦の認識にとって重大な出来事であるにとらえ、ほぼ三ヵ月間にわたり連日、その事実経過や関連の連載記事ならびに識者の論説を長期にわたって掲載している。それに対して県内の関係諸団体もすばやく反応して、高教組や県労協などの教育民主団体を中心に結成されていた「民主教育をすすめる沖縄県民会議」がいち早く反対声明を出した。また、沖教組でも文部省の検定強化による民主教育の危機ととらえ、小中学校教科書での沖縄関係記述の洗い直しの機関を設置することを決定した。さらに、この教科書検定では中国への「侵略」を「進出」と書き替えさせたことが明らかとなり、国会でも大きく取り上げられ、中国や韓国をはじめとしてアジア各国で教科書批判が拡大し外交問題と化した。しかし結局、外交問題では曖昧さを残しつつ記述修正の姿勢を打ち出した政府見解の発表によって、火種を残しながらも終息に向かった。だがその対外的な政治的決着とは別に、沖縄では従来の沖縄戦の認識を否定するものとして県民から多くの反対意見が、地元紙の「読者から」の欄に連日にわたって数多く寄せられた。地元紙においても、教科書検定、住民虐殺、沖縄戦に関する読者からの投稿によって、平和や戦争についてそのように数多く論じられたの

²⁶地元紙に共同通信配の「教科書、厳しい検定が定着 56年度の文部省検定」の見出しの記事解説（一九八二年六月二六日付）が掲載され、その後『沖縄タイムス』の七月四日付けに「高校教科書から全面削除 日本軍による住民殺害」の見出し記事が掲載された。その後、九月いっぱいほぼ三ヵ月のあいだその関連記事が掲載されており、紙面を通して県民の関心の高さがわかる。

は、かつてないことだったと指摘されている²⁷。そしてとくに注目される点は、この問題をきっかけとして県民の中から、これまで語られることのなかった沖縄戦における新たな事実が相次いで証言され²⁸、それをきちんと語り継いでいこうとする気運が顕著にあらわれた点である。前述したように、当初この問題にすばやく反応して立ち上がったのは主として教育関係団体や沖縄戦研究者だったが、その反響がこれまでになく県内各層にわたって瞬時に広がっていった点が特徴として指摘できよう。それは、地元紙に県民から多くの投書が寄せられ、沖縄戦の体験者から憤りを込めた新たな証言が相次ぎ、新事実も次々と提起された事実が端的に示している²⁹。その次々と現われた新しい証言者は、教科書検定で日本軍による住民虐殺が削除されたことに対して、「今、語らなければ再び悲惨なことになる」と、悲痛な叫びと固い意思によっ

て、三十七年間の沈黙を破り新たに語りはじめたのである。そして、戦後世代も含めてその証言を聞いて受け継ごうとする催しや集会が行なわれ、あらためて沖縄戦の記憶の継承の重要性が再確認されたのである³⁰。その一連の動きは、まさしく教科書問題を契機として、体験者を中心とした沖縄住民が沖縄戦にあらためて向かい合うことによって、沖縄戦の記憶が新たに語りなおされる過程であったと指摘できよう³¹。

そして、県民の中で沖縄戦の記憶が新たに語りなおされることによって、それを象徴するように新聞紙面に新たに登場した言葉が、この「命どう宝」という語句であった。『沖縄タイムス』紙では、教科書問題が起こったあと、すぐに「削られた“事実” 教科書検定を追う」を連載し、その後「平和の検証 いまなぜ沖縄戦なのか」を長期連載している³²。その「第1部実相」の結びにおいて、その「命どう宝」という語句を二回にわたって取り上げて論じており、その中で次のように指摘している。取材班は、同連載

²⁷ 「本紙の投書欄から」（『沖縄タイムス』一九八二年八月六日）。

²⁸ 地元二紙での新たな証言記事の見出しと期日を記すと次のようになる。「県人の殺害現場を見た 日本軍虐殺に新証言 読谷村の池原さん スパイ容疑で2人 日本刀で首バツサリ」（一九八二年八月三日夕刊、琉球新報）、「私も憲兵の残虐行為を見た 読谷村の松田さん 池原さんの証言裏付け」（八月五日、沖縄タイムス）、「ここです！ 現場は… 記憶をたどって確認」（八月六日、沖縄タイムス）、「殺害された2人の身元確認できず」（八月七日、沖縄タイムス）、「姉は日本兵に殺された 伊江島出身の山城氏が本土紙に手記」（八月三日、琉球新報）、「羽地でも日本兵が住民虐殺 スパイ容疑で8人 沖縄市・西銘成徳さんが証言」（八月一三日、琉球新報）、「あそこが殺害現場 旧日本軍の県民虐殺 37年ぶりに羽地へ 西銘さん新たな証言者も」（八月一三日夕刊、琉球新報）、「『生き証人の会』結成へ 県民虐殺の真相」（八月一四日、沖縄タイムス）、「金武町屋嘉でも虐殺が… 妻の目撃で斬殺 久場政昌さん証言」（八月二九日、琉球新報）、「私も虐殺現場見た 次々と証言者 スパイ扱いされた大城さんが語る 耳斬り落とし惨殺 許田さん黙っておれず…」（九月一四日、沖縄タイムス）。

²⁹ 「広がる波紋 教科書問題」（『沖縄タイムス』一九八二年九月三日）。

³⁰ 「私も虐殺現場見た 次々と証言者」（『沖縄タイムス』一九八二年九月一四日）。

³¹ 翌年の『沖縄タイムス』は「復帰11年を迎える」という見出しの「社説」で、次のように記述している。「復帰満十年だった昨年は、くしくも教科書問題が吹き荒れた。高校教科書から、沖縄戦の中で行われた『日本軍による住民殺害』の事実が文部省検定で削除され、県民の反響を呼んだ。しかし、その中から県民はあらためて『沖縄戦は何であったか』を問い直し、戦争体験を風化させない平和への認識を深めた」（一九八三年五月一五日）。

³² 『沖縄タイムス』では「削られた“事実”」は七月七日から十一日まで五回の連載。また「平和への検証 いまなぜ沖縄戦なのか」の「第一部実相」は八月十四日から九月二日までの三五回連載と識者座談会（九月二五日）、「第二部37年目の風景」は十月三日から十三日の連載十回で、延べ45回の連載が行われた。『琉球新報』では、「沖縄戦の継承」という表題で「第1部虐殺はあった」「第2部記録再見」「第3部教育」の構成で、七月十一日から八月十五日まで延べ26回の連載が行われた。両紙の長期連載記事から、その問題に対する県民の高い関心がわかる。

のために沖縄戦体験者の証言を採録する過程において、日本軍の「玉砕の思想」とは異質な考えに突き当たった。それは、沖縄戦で防衛召集により編成された、沖縄住民を中心とする防衛隊員³³の特徴的な行動様式である。その防衛隊員の行動様式において、どうせ負け戦で死ぬのなら家族と一緒に行動を伴にしようと、隊員個々の判断で部隊を離れたり逃げたりした行為がみられた。しかも、その行為が決して例外的な行動ではなかったという事実が、その聞き取り調査を通して浮かび上がってきたという。そして、その防衛隊員の一般的な特徴として、「兵隊意識の欠如、希薄な玉砕思想」を指摘し、先述の大城将保氏の論文を引用しながら、その本土出身兵士とは異質な思考や行動様式について「命どう宝」という言葉で呼ぶことを紙面で提案している。それは、教科書問題をきっかけとして、体験者の証言を採録しながら「沖縄戦とは何だったのか」を深く問いかける連載の取材過程で、その「命どう宝」という言葉が見いだされ、その語句がはじめて新聞紙上で登場した瞬間であった。そしてそのことは、「命どう宝」という言葉によって、沖縄戦の記憶を語る新た

な枠組みが「発見＝創造 (invention)」されたことを意味した。とくに注目したいのは、沖縄戦の研究者のあいだで使用されていたこの「命どう宝」という語句が、新聞紙上で取り上げられ多くの県民の耳目にふれて認識されたことで、その後に沖縄戦を語るさいの一つの言説を形成したという経過である。

事実、その「命どう宝」という語句は、その後、さまざまなところで使用されるようになる。例えば、高校や小中学校における6・23「慰霊の日」特別授業でのテーマ³⁴や平和教育実践報告集の主題³⁵、あるいは連続講座「沖縄戦と平和教育」の主題など教育現場において使用されるようになる。また、一九八三年に結成された「沖縄戦記録フィルムフット運動の会」に協力するため、翌年の慰霊の日には県内の音楽演奏家が集いコンサートを開催しているが、そのテーマが「ぬちどうたからコンサート」とし

³⁴本部高校は、一九八四年の6・23「慰霊の日」の取り組みとして、「今の時代をどう生きるか」という全体テーマの中で、図書館は独自に「命どう宝」をテーマに掲げて、対馬丸遭難体験者にインタビュー、学校長教頭への体験記依頼、伊江島の集団自決壕遺品を借用し反戦資料展を開催している。また八重山高校では八五年慰霊の日の特設授業（英語）で「An oral History of The Battle of Okinawa」という英文証言集を読んで沖縄戦を学んでいる。授業を担当した江川義久氏は、その授業の目的として「『命どう宝』を教えつづけよう」を挙げて、「命どう宝（命こそ宝）」という、沖縄戦の残したゆずることのない信念が、生徒たちの胸の中で次々と増殖して、反戦平和の確固とした意識まで高まってくれることを期待したい」と述べている（沖縄県教育文化資料センター・平和教育研究委員会編『オキナワ・平和への実証―学校から、地域から』、一九八八年二月、八―一八五頁、一二七―一三三頁）。

³⁵天妃小学校は、八七年に行った憲法記念日や春の遠足での平和集会（健児の塔）での取り組み、教科での取り組み、学年平和集会（教師の戦争体験）、記録映画（「人間をかえせ」）などを収録した平和教育実践報告集『命どう宝』を発刊している（沖縄県教育文化資料センター・平和教育研究委員会編『中央教研・平和教育分科会集録』、一九九〇年十月）。

³³沖縄守備軍は「兵役法」に基づいて、満17歳以上満45歳までの男子に軍人の資格を与え、補助兵力として2次にわたり沖縄住民を防衛召集した。第1次は1944年10～12月で主として特別警備工兵隊などに編成して飛行場建設工事に従事させた。第2次は45年1～3月で部隊配置変更に伴う兵力補充を目的として持久戦方針のため陣地構築作業を主任務とした。防衛召集は原則として沖縄連隊区司令部司令官の召集令状をもって執行されたが、実際には正規の手続きを経ることなく各部隊ごと恣意的な召集がなされ、年令に関係なく身体障害者なども強制的に入隊させられた。防召隊の多くは一家の大黒柱であり、戦火のなかの家族の安否を気遣って独断で部隊を離脱する者も少なくなかった（大城将保「防衛隊」『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社、一九八三年）。

て開催されている³⁶。さらに、一フィート運動の会は八五年に「戦後四十年沖縄からのアピール」を発表しているが、その声明文の中で再び私たちが戦争の被害者や加害者にならないこと、そのためには沖縄戦から体得した「命どう宝」という尊い教訓を、戦争への動きを阻止し、抗議して生き残る思想にまで高めて、さまざまな反戦平和を創る行動へと立ち上がることを呼び掛けている³⁷。その後、その「命どう宝」という語句は、沖縄戦から学んだ尊い教訓を表す言葉として、沖縄から日本や世界へアピールする際のキャッチフレーズとして重宝され、平和集会をはじめとして多用されるようになっていった。例えば、一九八五年には、沖縄が日本復帰した日に毎年開催されている「五・一五県民大会」(護憲反安保県民会議主催)の宣言文の中で、初めて沖縄の声を内外にアピールする言葉として、その「命どう宝」という言葉が使用されている³⁸。また、国際平和年であった八六年の慰霊の日には、屋良朝苗元県知事など有志四十一名が沖縄からのアピールとして、「命どう宝」の思想を主張した声明文を七ヶ国に翻訳して、それを各国指導者に送付している³⁹。さらに八八年には、第三回国連軍縮特別総会へ一フィート

運動の会をはじめとする県内の平和団体が参加しているが、そこでも沖縄から「命どう宝」の思想を世界にアピールしている⁴⁰。

このように、「命どう宝」という語句は、実証性の観点からすると確かに、その出所経歴が不明で曖昧な点もあるといえようが、戦後沖縄の状況、とりわけ「復帰」後の沖縄を取り巻く状況と深くかかわって、その語句が登場し使用されていることがわかっていく。とくに、その語句が、八二年の教科書検定問題で沖縄戦における住民虐殺の記述が削除されたことをきっかけとして、沖縄戦を新たに語る言葉として登場していることが確認できよう。それは、沖縄戦の教訓から反戦平和を希求する沖縄の人々と沖縄社会の価値観と理念を色濃く体現した言葉だったのだ。そしてその経緯を踏まえてみると、むしろ問われているのは、この「命どう宝」という語句のほうではなく、それを分析する側の眼差しであることがわかる。分析者は、その語句のどの側面をとらえ、何を重要視して論じるかというように、分析者の視点そのものが問われているのだ。したがって、私は、その「命どう宝」という語句について、実証性の観点から史實的に根拠不明で曖昧だと批判するのではなく、むしろその語句が戦後ならびに復帰後の沖縄社会の状況と切り結んだ沖縄の人々の価値観と理念を背

³⁶ 「那覇で『ぬちどうたからコンサート』」(『沖縄タイムス』一九八四年六月二四日)。

³⁷ 「戦後四十年沖縄からのアピール」(沖縄戦記録フィルム1フィート運動の会10周年記念誌編集委員会『1フィート運動10周年記念誌』一九九三年十二月、一七五～一七六頁)。

³⁸ 「反戦平和の闘い強化“命どう宝”をアピール」(『沖縄タイムス』一九八五年五月一六日)。

³⁹ 「命どう宝の思想で平和行動を」(『沖縄タイムス』一九八六年六月二四日)。

⁴⁰ 「国連でも“命どう宝”」(『沖縄タイムス』一九八八年六月四日)。「世界へ響け“命どう宝”」(『同』六月二一日)。なお、第三回国連軍縮特別総会への同行取材が「世界へ響け“命どう宝”」という表題で五回にわたって連載されている(『同』六月二二日～二八日)。

景に形成され、反戦平和のイメージを体現している事実こそ注目したいと考える。いま歴史研究者に求められているのは、沖縄戦の教訓から得た平和に対する沖縄の人々の思いが託されたその言葉を、実証性の観点だけから裁断するのではなく、それを複合的に眼差してとらえる視点にあるといえよう。

結びにかえて

ところで、「命どう宝」という語句が、そのような近年の平和団体のアピール文でキャッチフレーズとして使用されている現象だけをとらえて、それはもともとあった庶民の言葉を大衆運動の組織者が政治的に流用しただけにすぎないとの指摘がなされている⁴¹。果たしてそうだろうか。その指摘は、図式的でわかりやすい解釈にみえるが、前述したように実際はそうではなく、そのような解釈とは大きく異なるものであった。それは、少なくとも次の二つの論点からみても皮相で浅薄な解釈だと言わざるをえない。第一にその解釈では、大衆運動の組織者だけが「主体的」であり、庶民は彼らの為すがままで、常に受け身の状態であるということを想定し前提にしている。しかし、その「命どう宝」という語句は、八二年の教科書検定を契機として、

体験者を中心にした県民が時代状況と切り結び沖縄戦を新たな語り直すことによって、「(再)発見」した言葉だった。それは、時代状況に危機意識をもった県民が、沖縄戦にあらためて向かい合うことで、その「命どう宝」という言葉に、沖縄戦の教訓としての反戦平和の価値観や理念を託したのである。それは言い換えると、県民が時代への危機意識によって、沖縄戦を「主体的」に語り直したことにより、形成された言説だったといえよう。その経緯が私たちに示しているのは、成田龍一氏が的確に指摘しているように、主体や客体はあらかじめ分割され固定されているわけではなく、「それぞれ具体的な状況や関係のなかで形成され、変化していく」⁴²という論点とつながっている。そして沖縄戦の認識はけして固定されたものではなく、状況や関係のなかで新たな位置から語り直されるものだ。その意味で、歴史は時代と切り結ばれ、現在から「再審」される⁴³。その際、解釈のせめぎ合いにおいて、発話者の位置やその「主体性」が問われるのだ。ここであらためて確認するために再度繰り返そう。「命どう宝」という言葉は、教科書検定で沖縄戦での住民虐殺が削除されたことにより、沖縄戦体験者を中心とする県民が、沖縄戦にあらためて向かい合い「主体的」に語り直して「(再)発見」した言葉だった。この論点こそが、「命どう宝」という言葉をとらえると

⁴¹ 栗野慎一郎「学問の『自由』とは何か」(『沖縄タイムス』二〇〇一年十二月一〇日)。その栗野氏の文章は、先述の私の文章(『同』十月三十一日)への疑問として提出された。それに対する私の反論(『同』十二月二二日)があり、栗野氏の再反論(『同』二〇〇二年一月八日)、そして私の再々反論(『同』二年一月二四日)がある。

⁴² 成田龍一『《歴史》はいかに語られるか』NHKブックス、二〇〇一年三月、二七〇頁。

⁴³ 上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』青土社、一九九八年三月、十一～十五頁。

きに、もっとも重要な論点だと私は考える。その重要な論点を看過しながら、近年の平和団体のアピール文でキャッチフレーズとして使用されている現象だけをとりえて、大衆運動の組織者が一方的に民衆の言葉を政治的に流用したとする解釈が、いかに皮相で浅薄な解釈であるかわかろう。第二は、沖縄戦の記憶に関連する問題である。戦争の記憶は、時間の自然的な経過に関係なく、ある出来事をきっかけとして、突然に記憶が想起される場合がある。むろん沖縄戦体験者も例外ではない。前述したように、沖縄戦体験者の新たな証言は、教科書検定で沖縄戦での住民虐殺が削除された出来事をきっかけとして、戦後三十二年が経過したにもかかわらず記憶が突然に想起され、新たに語られたのである。何らかの状況や関係に刺激されると、時間の自然的な経過に関係なく、戦争の記憶は想起され新たな位置からまた新たに語られるのだ。高橋哲哉氏によると、戦争の記憶を思ううえで決定的に重要な点は、クロノロジーという自然や理性的な時間が流れる正常な秩序に対して、それを混乱させ転倒させて忘却への反逆を意味するアナクロニズムという視点にあると言う⁴⁴。さらにその記憶の継承で重要なのは、証言者が「差異や忘却を含んだ反復」として「自分の位置から新たに証言する」⁴⁵ことだと指摘している。「命どう宝」という言説の形成は、ま

さしくその指摘と重なるものであり、教科書検定をきっかけとして県民が沖縄戦の記憶にあらためて立ち向かい、それを「主体的」に語り直すことで、「(再) 発見」した言葉だったのである。

さて、もう一つ、「命どう宝」や「非武の文化」という語句に対する琉球史研究の批判について指摘しておきたい点がある。それは、「実証的研究」という学問的意匠によって隠蔽された「政治的無意識」⁴⁶に関連する問題である。琉球史研究は価値的判断を伴わない「客観的中立性」

(それ自体が疑わしいか) という実証性的研究の名のもとで、その「非政治的」立場を装ってきた。しかし近年の琉球史研究は、その「客観的中立性」という御旗によって、社会の支配的な価値観を無批判に受け入れている場合が少なくなく、「非政治的」立場を装いながらきわめて「政治的」な役割を果たしている場合が多い。いま琉球史の研究者に鋭く問われているのは、発話する者の位置の政治性、すなわちあなたはだれに向かって何をどのように語るのか、という問題群である。その意味で、琉球史の研究者にとって、その実証的研究に埋没して自らの研究がおよぼす「政治性」を問わないあり方に対して、強い疑問が突き付けられているといえよう。琉球・沖縄史の歴史研究において、いま研究者の一人ひとりに鋭く問われているのは、実証的研究の蓄積だけでなく、少なくとも発話の

⁴⁴ 高橋哲哉『戦後責任論』講談社、一九九九年十二月、六八頁。

⁴⁵ 同右、七七頁。

⁴⁶ フレドリック・ジェイムソン(伏橋洋一・木村茂雄・太田耕人訳『政治的無意識』平凡社、一九八九年八月、二二頁。

位置における政治性の問題があることを自覚したい。

これまで見てきたように、平和の礎の前で行われたクリントン演説について、その演説のむすびの部分で使用された「命どう宝」という語句に関連する議論は、その言葉に対するたんなる認識や解釈の問題ではなく、論者の位置や視点にかかわる〈政治性〉の問題を含んでいる。その意味で、その「命どう宝」という語句を、どう認識し解釈するかは、それを論じる論者の発話の位置の〈政治性〉が鋭く問われる問題だといえる。しかし、琉球史研究（沖縄研究）では、その視点が欠落しており、ほとんど問題にさえなっていない。いま、沖縄研究（琉球史研究）に求められているのは、実証的な研究の蓄積だけでなく、学問的意匠で「非政治性」を装いながら、きわめて「政治的」な役割を果たしている言説への批判であることを強調しておきたい。